

田吾作生活

朝露生

春とは云へどこの夕風の執ねくも寒きことかな。かさらば桑港灣よと吾等五人はつぶやきて船室の戸を鎖した。けたいましき汽笛の音と共に、船はゆらゆらと動きいだした。船内には早くも電燈が點ぜられてゐる。浪はや、荒くなりゆきて、船尾の水車は、無愛喬にも吾等の胸にまで余響を與へる。室にみてる安値煙草の悪臭と共に、吾等の身もゆらゆらと、まことにイヤな心持である。一行相顧みて苦笑した。船室には違ひないが上等客むきの船房を借れ切つたわけではない。食堂の片すみ、カーテン一つに余地を區畫して、二列の共同椅子が并んでゐる。吾等放浪黨はその片はしを占領してゐるのだ。相似たる境遇の碧眼赭髯共、背中合せに腰かけて、且語り且煙を吹くに忙はし。吾等を挟さみて、ヤンキーの泥酔漢も居る。古色蒼然たる豚尾先生も居る。かくてもこの席は船底の混在に比して紳士的なのである。この余地を得

んとして、船底からノコノ鼻つてき、失望してかへるもの幾人あるかしれぬ。舷頭に立ちて、暮色をながめるわけにゆかぬは、この名譽ある地位を失ひたくないからで、東部に於ける經濟界の恐慌と例の有難き排斥熱のため、吾等は職を失ふて學を廢して仕舞つたのである。思へば金をつくりつゝ、學問の蠶食を試みんとは、チト蟲がよすぎる話であつた。ことしは田園の人となつて、筋骨を鍛練しやうと同志仲を結びて桑港を去つたのである。船はいつの間にかサンバプロ灣を過ぎ、サン灣に入つて居る。夜はや、更けて、異人種のいびき音、交々聞ゆる頃、吾等は夜氣に睡魔を打たせて舷頭に立つてゐる。星光燦として寒く遠岸の燈影浪の上に輝き、船は誇り顔に暗を衝いてサクラメント河を遡つてゆく。吾等もしばしばとるむほどこに、午前二時コントラコスタ郡のジョーセー島に船をよせた。吾等はこの島にてお百姓の第一歩を學ぶつもりである。船は吾等と多少の荷物とを波止場に残し、いそいそとまた河を遡つてゆく。知らぬ土地の深夜、道たどるべき術もなくて、

ほど近き建物の椽の下にひそみ、二三の毛布に足をのつゝみて、五人一團となつた。寒氣は荒々しくも夢をゆすりさまして、曉の待ち遠しさ、心々に愚痴をこぼしてゐるかしらねど、何れも強さうな顔をして瘦我慢に力んでゐる。議論を好むこと、率直にして舌鋒鋭さによりて鐵兵衛てふ名の錚々たる男、コンマ以下の趣味に精通してゐながらクレオパトラの名を知らざりしとの理由によりて美人の名をのまゝ尊稱に代へられてゐる男この二人は一行中の花役者である。吾は弱蟲と自稱して豫じめ嘲笑の機先を制し、他の二人にそれ相應の雅號を捧呈して置く。一人は農學生なるが故吾黨中にては母家の太郎左衛門、一人は獨逸文學を嚙り居るせい、か、イヤに七くどく理窟を捏ねるところから理窟屋とたいへ奉る。氣焔は霜となつて帽子の上の花を飾つてゐるほどだから、何れも沈黙して身をふるはして居るばかりである。

やがて夜が明けはなれたので、道を求めて耕地の方に進んだ。一本柳のかげに殘燈まだ赤きところあれこそ目ざすキャンプであらふと勇氣加はりて

やゝ身のうち暖かになつたが、行李やら臥具やらが厄介にて兩腕の筋が切ればせずやと危ぶまるゝ。先づ歎聲を發したのは「弱蟲」であつた。二哩に足らぬ道ながら、吾には十里の旅のやうに思はれた。柳の木かげからネグロ顔の日本人はゴロゴロと出てきた。何れも一騎當千の田吾作ばかり、面皮の黒きは動功の多さに比例してゐるのだから、吾輩の先輩として何れも様へ敬意を表した。仲には吾等の友人も居つた。この人の紹介にて吾等も彌々田吾作の連判帳に記入せらるゝとなつた。時、是、〇八年三月三日、母國にてはお雑壇に桃の枝を供へて白酒を汲んで居る頃であらふなど、慣れぬキャンプ生活に引きくらべて、内心甚だ平かてなかつた。この日一日は我等の仕事を休み、臥床を作ることゝした。柳を中央にして、二軒のキャンプがある。東なるは粗末ながら住家らしきしつらひありて、臥床もそれ設けられてゐる。總勢三十八人とのことにて、とてもこの一家にのみ住みきれずクレオパトラ君だけ仲間入りした。吾等は他の一軒に住むことゝなつたがそこ

は庖厨と食堂とコックのルームとの外物置部屋のあるばかり、吾等はその中に新たに寢臺を築くわけだ。すでに建設を終へて布団をならべてゐる一組もある。例の波止場近くの納屋にゆきて古板片を肩にし鐵兵衛先づ勇氣凜々として歸つてきた。つづいて吾等も片息になつて無事到着、鋸と槌とを動かして苦闘二時間余り、納屋の片すみに二つの寢臺が据えつけられた。窓に近き方には理窟屋と羽蟲と鎮坐します。間に机代りの板を隔て、鐵兵衛と太郎左衛門と枕をならぶ定め、覺束な板たゝみの上に、麥藁をしきつめ、その上に布団を安排して設備是に全たした。芋袋に麥藁をつめて枕とし、蜘蛛の巢の壁に釘うちつけて帽子をそこにかくるのである。

この夜は薄き布団の寒くて眠られず外套を重ねなとして轉寢した。ありのすざびにつらかり市中の働口など思ひいだし、彈條臥床など今更戀しく思ふものもあるであらふ、六時に起床の鐘が鳴つた。鐘と云へば鹿つめらしいが破損した農具の一部か、菱形の環をなせる鐵片を窓外にかけ、これ

を叩くのである。ジャンジャン／＼となる頃は吾等何れも起きてゐたのだ。化粧石鹼香水も香油もこの天地には用がないのである。カラヤカフスや扇にいたりて無用の閑具、ネキタイやピンや冬の扇、抛擲して可なりだ。首に巻くハンケチの流石に白絹なるは見つともなし。こゝにてはやはりメキシカンのやうな更紗のハンケチを巻く方よかつたのだ。古服に破帽子、身を堅めて立つを見れば何れも堂々たるお百姓様だ。東家の面々も起きてくる。堤の下の河にゆきて口漱ぐもある。井戸のはとりにて黒い顔を洗ふてゐるものもある。吾先にと食堂につめかくる。河より獲たる鯉の味噌汁鄙びてゐるが風情ある。何れも健啖豚の如し見るから勇ましい。七時に鐘がなつて働さぬにづる定め、一同は番號をもつて居るので、仕事は戸外に張りだされてゐる。余は三百八十一號であつた。吾等の一行は甘藍植と云ふ役を仰せつけられた。東導せるは古參の黒顔髻のある次位頭取である。三町ばかり野良にいで、霜白き苗島について。こゝにて苗を採るのであるが、日未だ暖かならず朝

風身を斬る上に、霜のため指先が落ちさうである。一時間ばかりにして苗を島地にはこび植ゆることゝなつた。例の大粒的な畔なしの一枚島、三四列植ゆるに半日を消し去つた。午後は空曇り風寒く加ふるに雨の御見舞弱蟲まづ休戦を主張したが、鐵兵衛頑として肯んぜず、しばらくして雨やみ正六時と云ふに一同切りあぐることゝなつた。飢えたる腹を抱へて走るさま中々觀ものである。そのあくる日は洋芹の種蒔の準備として苗床をつくる仕事であつて、熊手を使用するのだが、熊手中々吾云ふことをきかぬ。平板、鏡のやうに地をならすこと中々むつかしい。石ころや土塊などは地の底に埋めるのであるが、時には地の底も石ころや土塊のみのところもあつて、途方にくるゝこともある。この島はサクラメント河とサンオーキン河とによりてつくられし三稜州である。見たところ周圍十哩位であるが中に五千ユーカーの耕地があると云へば面積或は今少し多いかもしれぬ。耕地は重に洋芹をつくるのであつて、毎年種代のみ二千五百弗あまり拂ふときく。甘藍や馬鈴薯、松實

菜などはほんの島内の需用に過ぎぬであらふ。幹部は會社組織となつて、幾多のキャンブにはそれぞれ頭取があり、かくて秩然たる仕事の進行を見るのである。吾等のキャンブは二十六號であつてボスは町田と云ふ人である。やさしい親切な人で、昔ゆかしき學生さんの潜んでゐるのであらふと噂とりどりである。さう云へば獨逸語などもいくらか解して居るらしい。三百余人の勞働者のうち二百人は日本人である。吾等のキャンブにては四百ユーカーの耕地が受持であつて、重に苗床の仕事である。水を引くために溝渠を掘ることや、苗床の間に溝をつくることや、種を蒔きての仕事、草をけづる仕事、かくて數月のうち苗をぬきとりて他のキャンブにわたしやるのださうである。他の方面にては、去年植えしセロリーを今盛んに切りだして居るところもある。筍菜を切りだして居るところもある。白人勞働者は馬を使用して最初の耕耘をやるもの、水揚器械室に働くもの、波歩場に働くものなどである。日本人の日給は一弗四十仙であるが、夏季には一弗七十五仙位、まで昇る

ことがあるとのこと、食費は一日廿仙位、ボスに拂ふべきコミッションは五仙づゝであるから、一日一弗位の貯蓄はできるわけだ。一年働けば三百餘弗、十年には三千弗、百年には三万弗よなどゝくだらぬことを云ひ合ひて大笑することもある。

東家にも書生さんはまじりて居るらしいが半数は純然たる御百姓のみである。布哇を卒業してきたのもあれば、フレスノサンノゼなどを轉戦してきた勇士もある。例の零點下の趣味にて、塔博の話にあらざれば酒色の談のみ、甚だ恐入るが中には無垢な真情の残つてゐるのもあり談じて衷心の機微に觸れて見れば、何れもうるはしさ人ばかりである。働さながら聲朗かに俗調の數へうたを歌ふものがある。所謂農園思想を露出したまゝで、彫琢をからぬ自然の言葉であるが、中には人情の琴線にターチした音色もある。一つ紹介して見やうか。

六ツトセー無理な仕事は身の毒と

女房の手紙を見るごとに

心うれしく無理をする

中々しほらしむことを云ふてゐるではないか。毛唐に叱られることや、言葉わからずに不自由することや、中々寫實に読み込んでゐる。最後に理想として横濱へ歸舟をつけし時の服装を書いてゐる二重マントロ金時計だとサ、その無邪氣サ加減まことに愛すべきものだ。文藝俱樂部の口繪をわた壁に貼りつけて、千朶萬朶の花見をしてゐるのもこの連中である。書生黨の中には、俳人も居る。新体詩人も居る。されど何れも讀書の元氣を銷沈さして仕舞つたらしい。新手の五人黨のみは、金文字の二三冊を後生大事に枕頭にかざり、毎日寸蔭を惜みては研鑽をすゝめて居る。クレオパトラ先生は、獨逸のラプストリーを拾ひよみしてゐる。理窟屋はシェリ、キーツ、バリンズなどの詩集を愛讀し傍ら弱蟲と共謀して、獨逸小説の翻譯をやつてゐる。鐵兵衛も名にし負はずやさしい男であつて、パイロンを繙いてゐる。太郎左衛門は専門の農業書でも纏んでゐることかとのぞき見るにこれも小説らしき横文字をたどつてゐる。その勇

氣いつまでつやくことぞ。續かなくつてサとは吾等と伊人仲間との押問答であつた。慣れぬ仕事の弱き身にたつらく、働きはじめのあくる日は雨に遇ふて半日休み、月の中ごろまた風はげしければとて休んだことがある。名詮自稱の弱蟲、恥かしくないこともないが、日にさらされし面皮の厚くなりゆきて、平氣で白晝惰眠を食ふこともある。閑くところによればこゝの仕事の如きは、農園の初段ださうで、これだに出来ぬやうには逆もお百姓たることむつかしいと吾と吾身をはげましてまた働きにゆくこともある。アメリカのありがたさには何日休まうと何日働かうと自分の勝手次第であるが。さりとてわがまゝな日暮しも出来まじとその后休まぬやうに心がけた。

日曜には一同仕事を休むのである。洗濯をするものもある。小宴を開くものもある。下等なるクラレットに酔ひて怪癖を振ふものもある。吾クレオパトラ先生もその馳走にあつかりて酔歩蹒跚、はからずも理窟屋に衝突し、御説諭を恭んしたこともある。ある日曜であつた。伊人新体詩人並に吾

等四人、花見にゆくことゝした。クレオパトラ先生は梢頭の花よりは解語の花の面影をながめんとてか、秘藏の寫眞を守りてひとり残ると云ふ。理窟屋に嚴命せられて、さらば船頭となりて一と役かけつとめんと、棹をとつて小舟に立つた。河を超えてゆくこと三哩、オークレーと云ふ村がある。村についで数十エーカーの果樹園、アーモンズの花今まさかりである。園に對して廣き芝生あり田舎の年若き男女入り亂れてベースボールを遊んでゐる。そを見るものゝ笑ひさゝめく中に、風さつとふきて落花は雪のやうにふりかゝる。わが國の梅の花のやうな清香は望まれぬことながら、千樹萬樹に紅雲棚びき、見る目飽かぬ心地する。小草花さく野邊の錦に身を横へて、日傾くころまでものがたりした。田舎寺の夕べの鐘に促がされて歸途についた。御寺に詣づる啼女たちの鄙びたれど流石に衣裳うるはしく、日曜らしき想する。葦間に舟をつけて、吾クレオパトラ先生は迎へに來てくれてあつた。勞働中は午前と午後二回、出次や勤惰などを調べに來るものがある。年若き白人

であるが、その面貌「胃活」の廣告に似たりとて何れも彼のことを胃活々々と呼んでゐる。このもの一言にて免職となることもあるのだから、何れも胃活を憚りて、彼の姿の近くに見ゆるうちには、何れも勤めぶりを見せて居る。勞働道德とか何とかやかましく云へば云はるゝが、一日十時間とはたらく身になりては、多少の蔭陽なくては体がつかぬのだ。新体詩人の一人は「胃活來る」と云ふ長篇を書きて一同の喝采を得たこともある。種蒔の主任はポンペイと云ふ大男である。その名實の相似たるところから、衆悉く彼を權兵衛さんと呼んでゐる。社長夫婦は馬車を驅りて見廻ることもある。かゝる次第故、毎日英語をはなす機會は絶無と云ふてよい。かの胃活に番號を尋ねられてそれより答へること出來ず恭しく札を示して事をすます人もある。コックは中年の日本婦人でその夫は同じく野良に働いてゐる。布哇よりの轉航者ださうで、味噌汗の中に乾鰯と素麵とを放して喰はせたり、コックせぬ甘藍に醬油をかけてだしたりする。中々奇抜なる料理をする女だ。布哇にて

孤女一人拾ひあげて育てたさうで、可愛らしき小娘がある。名も異國ぶりに近くオリカと云ふのだ。十二位だらうと思ふが、からだの發達に比して教育の開發をうけてゐない。この頃は島にある小學校に通ふて居るのであるが、家庭はこのキャンブであるから受くる感化はブラズ的とは云へない。多くはマイナス的である。憐れむべきものだ。残月と柳の葉かげにかけて、清新の曉色を慾まにながむることや、夕星を浪にもませて、船を暮靄の中に放つなど、詩趣多き朝夕のたのしからぬわけもないが、圖書館なく公園なし書店なし教會なき鳥流しの境涯、ましてや學校を退きてかゝる生活に早變りせる身の、悔やしからぬことあらふか。半夜人静まりて燈火ばかり吾等の友、この恨忘るべからず、とて各學課にいそしむこともある。せめてはこの島にて持ち來りし書たけも研究し了らんと相勵ましてゐたのに、こゝも有爲轉變の風吹きわれ、居ること二十五日にしてこの島を去ることとなつた。